

お雇い外国人^{*1}と近代登山

山岳部 中井祥雅（昭和 42 年卒、物故者）

1. 宗教・信仰登山と近代アルピニズム

明治時代以前、山は信仰の対象であった。すなわち、修験者が修行して呪力、験力を獲得する場であった。しかしながら、明治新政府の宗教政策（神仏分離）によって壊滅的打撃を受け、信仰の対象としての山は、地縁等のある一部の日本人のみに受け継がれることとなった。その結果、山は畏怖の対象ではなく、「風景の背景」としての山、「稲作に必要な水を供給する水源」としての山など、「自然」として人間が感情的につながりを持つことができる対象として捉えられるようになった。

近代アルピニズムとは、イギリスを含むヨーロッパに発祥し、山に登ること自体を目的とするスポーツとしての登山である。そこでは、山は単なる岩と土の塊であり、また観察の対象、人間の知恵で処理することができるものと捉えられる。

2. 誰が近代アルピニズムの概念を持ち込んだのか？

明治政府は西欧の科学技術を取り入れ、積極的に近代化を推進した。その結果、鉄道、灯台建設、造船、電信、通信網、建築、医学、造幣、教育、法整備、軍隊整備など諸分野において多くの欧米の知識人、科学者、技術者が雇用されることとなった。フルベッキ（政治、法整備）をはじめ、ポアソナード（民法、刑法）、ロエステル（憲法）、ジュ・ブスケ（陸軍）、ドゥグラス（海軍）、キンドル（貨幣制度）、ガウランド（科学的考古学）、モルレー（学制改革）、大森貝塚を発見し、またダーウィンの進化論を日本に紹介したモース（生物学）、岡倉天心の師となったフェノロサ（哲学、美学）、ミルン（鉱山学→地震学）、“A Handbook for Travellers in Central & Northern Japan”の編纂に加わったチェンバレン（言語学）、糸魚川・静岡構造線を発見したナウマン（地質学）など、多士済々であった。

こうして雇用された多くの外国人は、本職で日本の近代化に貢献する傍ら、余暇を利用して日本の地理、自然、気候、生活様式、習慣、風俗、精神世界、信仰などを明らかにしていった。また、当時の大臣を越える俸給が支給され、経済的にも恵まれていた。

3. 日本アルプスの命名者としてのガウランド（William Gowland, 1842-1922）

「日本アルプス」という名称は、“A Handbook for Travellers in Central & Northern Japan”へのガウランドによる寄稿文の中で初めて使われた。この本は明治 14（1881）年に初版が発刊された。外交官のアーネスト・サトウとハウスの共編で在日外国人のための旅行案内書である。チェンバレンも第 8 版から編集に加わり、大正 2（1913）年までに第 9 版と増補、改訂を重ねて発行され続けた。中部山岳地帯を目指す外国人にとってのガイドブックとなり、後に志賀重昂が著した『日本風景論』に影響を与えた。

さて、初版への寄稿の序文には、“… Amongst these their especial thanks are due to Mr. B. H. Chamberlain, Mr. W. G. Aston, Mr. T. R. H. McClatchie, Mr. J. J. Quin and Mr. W. A.

Woolley for contribution of considerable extent. To Mr. W. Gowland they are indebted for valuable remarks upon the geology of Yoshino and the Hida-Shinano mountains, besides detailed information concerning the principal peaks in the latter range, and to Mr. Milne for the ascents of Gan-jiu-san, Iwaki-san, and Ban-dai-san, with notes on their mountains in Northern Japan”と記されており、ガウランドが飛騨、信濃地方を担当し、実際に多くの頂上を踏んだことが理解できる（下線は執筆者挿入）。

また、本文の ROUTE 30 の部分に、“… The range bounding these provinces on the E. is the most considerable in the Empire, and might perhaps be termed the Japanese Alps. Many of the peaks retain their snow caps, or are streaked with snow, until the early autumn, while some of the recesses and gorge where it is partially screened from the sun's rays, the snow never entirely disappears. …”との記載が見られる（下線は執筆者挿入）。

ここに初めて「日本アルプス」という名称が用いられた。しかし、断定することなく might や perhaps というあいまいでぼかすような表現で、be termed the Japanese Alps と、「日本のアルプスと見なしても（名づけても）いいのではないか」としている。

地質や山脈を構成する岩石を調査した結果、日本の中部山岳地帯の地形がヨーロッパ・アルプスのような氷河地形とは異なることを認識していたと推測されることや、当時、一流のアルピニストであったダン・デュランや F. C. グローブなどとも交流があり、近代アルピニズムの舞台となったヨーロッパ・アルプスの状況を熟知していたことなどから、日本の中部山岳地帯を「日本アルプス」と呼ぶのをガウランドが躊躇した様子がうかがえる。

snow never entirely disappears は万年雪を指している。日本では最近まで氷河は存在しないとされてきたが、立山山系の剱岳（2999m）を取り巻く3つの雪渓（万年雪）——御前沢雪渓、三ノ窓雪渓、小窓雪渓が、2013年氷河と認定された。ガウランドが氷河であるかもしれないと、疑問を抱いていた万年雪が約100年以上も経過した後、最新の科学的、地学的調査で氷河と証明されたことになる。

中部山岳地帯を「日本アルプス」と命名することで日本の近代アルピニズムの道を開いたガウランドではあるが、彼の日本の山へ費やしたエネルギーや興味は古墳研究へ向かうことになる。初登頂に最高の価値を見出す近代アルピニズムは、ヨーロッパ・アルプスにおける最後の未踏峰マッターホルンも1865年に登頂され、未踏峰がたくさん残されたヒマラヤやアンデスに舞台を移すことになる。ガウランドが日本の山にこだわらなかったのは、世界の山に比べて日本の山のスケールが小さいことに気づき、さらに世界の先端を走る近代アルピニズムの眼が、8000m級に向けられているのを知っていたからだとは私は考えている。

4. ガウランドからウェストン（1861-1940）

ウェストンは明治21（1888）年、宣教師として来日した。笠ヶ岳（2898m）に外国人として初登頂するなど、“A Handbook for Travellers in Central & Northern Japan”を参考に中部山岳地帯を広く歩き、『日本アルプス登山と探検』、『東海の遊歩道』などを著し、日本の山岳をヨーロッパに紹介した。また、1857（安政4）年に世界で初めて設立された

The Alpine Club のメンバーでもあり、日本でも山岳クラブの必要を説き、明治 38（1905）年に日本山岳会が創設された。関西学院大学の創設者 W. ランバス（1854～1921）の来日の時期とほぼ重なる。

5. 志賀重昂（1863-1932）

志賀重昂はもと地理学者であったが、当時のキリスト教教育を受けるもののこれに反発、欧化主義、西洋崇拜に反対し国粹保存主義を唱えた。明治 27 年、『日本風景論』を発表した。明治 38 年までに 15 版を重ね、福沢諭吉の『学問のすゝめ』とともにベストセラーとなったが、その構成は“A Handbook for Travellers in Central & Northern Japan”にそっくりであった。その中で「登山の気風を興作すべし」という項目を設け、若者の登山熱を煽った。

6. 登山のスポーツとしての特殊性

どんなスポーツでも同じことがいえるのだが、登山も明治時代の比較的富裕層が興味を示し、旧制高校生、大学生の間に広まり普及していった。登山をスポーツとしてみるなら、他のスポーツと異なるのは、ルールがないこと、自然を対象とすることから勝敗を決めることができないことが指摘できる。そんな背景があるので理科系から文科系まであらゆる学問的アプローチが可能で、出版物の多いのも特徴として挙げられる。

京都大学教授で仏文学者であり登山家でもあった桑原武夫氏は、『登山の文化史』の中で登山を支える基盤として「市民社会の充実」をあげている。

7. 関学山岳部の歴史（海外登山略年表）

年	事項
1920（大 09）年	9 番目のクラブとして設立
1961（昭 36）年	クラブ創設 40 周年記念としてペルーアンデス遠征。ワスカラン峰（6768m）登頂
1964（昭 39）年	カナダ・ローガン峰（6050m, 現 5959m）遠征。部員 7 名登頂
1969（昭 44）年	ヒンドゥークシ・イストル・オ・ナール峰（7403m）遠征
1971（昭 46）年	ボルネオ・キナバル峰（4101m）遠征
1973（昭 48）年	第 2 次 RCC エヴェレスト登山隊に OB1 名が参加
1979（昭 54）年	カラコルム・ハーディンゲ（現シアピーク）峰（7024m）遠征
1986（昭 61）年	カラコルム・ディラン峰（7257m）遠征
1998（平 10）年	日本山岳会青年部カンチェンジュンガ隊（カンチェンジュンガ主峰, 8586m）に OB1 名が参加
1998（平 10）年	日本山岳会学生部ブータンヒマラヤ登山隊 1998 に部員 1 名が参加
2002（平 14）年	ヒマラヤ・カラパタール（5545m）ヘトレッキング（部員 2 名）
2008（平 20）年	ヒマラヤの未踏峰ディンジュンリ（6196m）遠征。初登頂（部員 2 名）

1964 年の海外旅行の自由化、ドルの持ち出し制限の緩和によって、合宿を海外で行うなど世界の山が行きやすくなった。

8. 自然保護と登録文化遺産

富士山は年間 30 万人の登山者を迎える日本一の山であるが、富士山の環境保全や登山者の安全対策等を図るため 2013 年から、入山に当たって登山者より協力金 1000 円を徴収する「富士山保全協力金」制度が実施されている。

また、白神山地世界遺産地域の核心地域は、遺産登録による知名度の上昇により、人の入り込みによる自然環境への影響が懸念されたため、既存の歩道を利用した登山などを除き、立ち入りが規制され、2003 年からは入山届制に変更となった。その他、上高地や北上山地の一部ではマイカー規制が実施されている。

一方、縄文杉で有名な屋久島においても、世界自然遺産登録後の山岳部の利用増加により、し尿問題は大きな課題となってきた。このため、2008（平成 20）年から人力やヘリコプターでの搬出などの対策が取られている。

海外では、日本に先んじて入山規制が実施されている。たとえば、ニュージーランドのミルフォードトラックは「世界で一番美しい散歩道」を謳うトレッキングコースであるが、1 日の入山人数を山小屋に収容できる人数に合わせて規制している。



2008 年 デインジュンリ峰（6196m）初登頂
（写真提供：執筆者）



2018 年度夏山合宿 先ほどまで登っていた
劔岳チンネの岩壁を振り返る
（写真提供：執筆者）

【編集者註】

- *1 お雇い外国人：明治前半を中心に、政府が先進国の学芸・技術・制度を摂取するために官庁や学校に招いた欧米人。ボアソナード・ベルツ・フェノロサ・コンドル・モースなど。（広辞苑第六版より）
- *2 現在は、日本アルプスにも立山の雄山北西山腹に見られる山崎カール（圏谷）など、氷河地形が存在していることが広く知られている。

■著者略歴

1943（昭 18）年 12 月 15 日生

1967（昭 42）年 3 月 関西学院大学経済学部卒業

1967（昭 42）年 4 月 報知新聞社入社、野球を中心に取材。定年退職後、同社後援の少年野球（ボーイズリーグ）担当

2003（平 15）年 4 月 大阪外国語大学国際文化学科比較文化 入学

2007（平 19）年 3 月 同 卒業

2007（平 19）年 4 月 大阪大学大学院言語社会研究科修士課程 入学

2010（平 22）年 3 月 同 修了

2011（平 23）年 4 月 大阪大学大学院文学研究科文化形態論博士課程在学中

2014（平 26）年 7 月 KGAA 会長表彰

推薦文：現役時代はもとより、卒業後も 1969 年の第 1 次ヒンズークシュ踏査隊に参加するなど、国内外における登山活動に活躍されました。また、長く山岳会委員長や例会山行企画実行係を担当し、会の発展・親睦に寄与されました。さらにそれに飽き足らず、定年後には大阪大学大学院に進学し、登山史の研究に打ち込み、その成果を KGAA 寄附講座にて講義するなど、まさに文武両道の範をお示しになりました。

2014（平 26）年 10 月 28 日没

■山歴

1969（昭 44）年 ヒンドゥークシ・イストル・オ・ナール遠征

1990（平 02）年 ニュージーランド・ミルフォードトラック

1998（平 10）年 ボルネオ・キナバル

50 歳を前に山岳部の仲間と年間 3 回（積雪期を含む）北アルプスを中心に定期山行を実施することを決める。

講座担当の中井祥雅氏物故のため、山岳会（山岳部 OB 会）委員会にて当時の講義資料に若干の手を加え原稿をまとめました。